群馬大学医学部 刀城クラブ会報

編　集　発　行
群馬大学医学部同窓会
発行責任者　森川　昭廣
編集責任者　福田　利夫
〒371-8511
前橋市昭和町三丁目39－22
電話027-220-7861(ダイヤルイン)
FAX(電話兼用)027-235-1470

刀城クラブホームページ http://tojowww.dept.med.gunma-u.ac.jp/　同窓会事務局メールアドレス tojoclub@showa.gunma-u.ac.jp

昭和キャンパス内桜並木（第４駐車場・看護師宿舎横）

目　次

入学おめでとう　同窓会長　森川　昭廣…２
入学オリエンテーション
学友会執行委員長　山本　青葉…３
平成24年度新入生・医学科学士編入生名簿……４
水芭蕉㊱　南福音診療所　吉住　幸子…５
訪問インタビュー
山本　青葉、遠藤　瑞貴…６～７
パジャジャラン大学交換留学実習報告……８～９
医療人能力開発センターだより②
臨床研修センター　センター長　田村　遵一…10
重粒子線施設だより③
重粒子線医学センター　教授　大野　達也…11
学会報告（同窓会補助）
国際原子力機関（IAEA）アジア地域協力トレーニングワークショップ
腫瘍放射線学　教授　中野　隆史…12
北関東・甲信越ペインクリニック学会第１回学術集会
麻酔神経科学　教授　齋藤　繁…12
支部だより……13
星野富弘「花の詩画コーナー」
―ありがとう私のいのち―　オープン……13
クラス会だより　……14～16
群馬健康医学振興会が一般財団法人に
生まれ返りました　……17
同窓会財政基盤強化協賛金について……18
群馬健康医学振興会助成金について……18
同窓会ホームページリニューアルのお知らせ……19
群馬大学医学部同窓会
刀城クラブ創設60周年を迎えるにあたって……19
名簿編集委員会からのお知らせ……20
役員会だより……20
学内・学外人事……20
謹告……20
編集後記……20

入学おめでとうございます

刀城クラブ入会
おめでとうございます

医学部同窓会・刀城クラブ
会長　**森川　昭廣**（昭44卒）

新入生の皆さんご入学おめでとうございます。医学の道を志し、歴史ある本学の一員になられましたことを心からお祝い致します。多くの皆さんは入学と同時に群馬大学医学部同窓会刀城クラブに入会し、正会員となりました。刀城クラブの一員としての誇りをもって、これから益々御活躍下さい。

本学同窓会の歴史をひもとくと、その設立は昭和27年（1952年）となっています。今年設立60周年を迎えます。「刀城クラブ同窓会」という名前がついていますが、刀は坂東太郎である利根川の「刀（利）」で刀圭（医術）に通じ、城は赤城山の城を意味すると伝えられています。同窓会は昭和キャンパス内の西南に位置する刀城会館の中にあります。刀城会館には各種行事に使われるホールと事務室、一般財団法人群馬健康医学振興会の事務室があります。ここでは春に見事な桜の満開が、夏はバーベキューに最適な青々とした芝生があり、秋は小さな黄色い舞扇の公孫樹が見事です。是非一度は訪れて下さい。

さて、皆さんの後ろには6,000人近くの同窓生がおります。北は北海道から南は沖縄まで、どこの県に行っても必ず同窓生がおります。この方達は教職員・同窓会事務局役員・職員と同様、刀城クラブの誇りをもってその支部の皆様に有用な情報を提供することをお手伝いしてくれます。それでは、刀城クラブの本部は何をしているのでしょうか。我々は会員の懇親と連絡はもちろん学生の海外研修支援、教員の研鑽支援、各支部の支援等に力を注いでいます。昨年の東日本大震災は未曽有の大惨事でしたが、同窓会としてすぐに東地６県在住の会員の方を御見舞し、またお便りを会報に掲載しました。このように全国におられる会員の方々と常につながりを持っていることを目指しています。また、皆さんに直接行っていることは、学友会や部活への援助、隔年開催される医学祭への補助、そして医科学生同士の国際交流への支援です。是非、医学部にいる間に国際的な交流プログラムに参加して下さい。同窓会も応援しています。

皆さんの実り多い学生生活を祈念し、刀城クラブ入会のお祝いを述べてお祝いの言葉と致します。

おめでとうございました。

平成24年４月７日　刀城会館

入学オリエンテーション

新 入 生 歓 迎

学友会執行委員長
山本　青葉（医学科４年）

学友会執行委員長を務めさせて頂いております、医学科４年の山本青葉と申します。刀城クラブの先生方のご厚意により、本年も新入生歓迎会が執り行われましたことを学友会として感謝申し上げます。

群馬大学医学部には学友会という全学生加盟の自治組織があり、これは群馬大学医学部の前身、前橋医専の建学時から名称・規約の変更こそ数度あったものの長年に渡って引き継がれてきた組織です。学友会の活動は大変多岐にわたりますが、その礎となるのはより良い医学教育・学習環境の実現を目指して行きたいという願いです。私が群大に入学して抱いた印象は、主体性があり、物事に対する問題意識が高い学生が多いということでした。学友会が行うアンケート一つとっても回収率は非常に高く、毎回多くの貴重な意見が寄せられます。そうした現状は、長年、大学が学生の自主性を尊重し、多くの好機が私達に与えられて来たことに起因すると考えます。教授の先生方始め大学側は学友会からの要望に対し、前向きに検討を重ねて下さることが多く、大変有り難く思っております。

これまで多くの諸先輩方が大学環境の充実に尽力して下さり、それら全てのお陰で今の私達の学生生活が存在します。戦後には焼け野原となった大学に学生が５キロの道のりを歩いて銀杏の木を運び、それが今の昭和キャンパスの多くの緑のもととなっているそうです。数年前、新カリキュラムが施行された際には、その改善を求めて学年の約半数の学生が大学との意見交換会に参加したと聞きます。

新入生の皆さんも、これからの学生生活でカリキュラムや学習環境に対し学生ならではの視点で改善の余地を感じることが多々あるでしょう。どうぞこれから学友会活動にご協力頂き、多くの意見をお寄せ頂きたいと思います。すぐには改善が難しいこともありますが、時間をかけてでも改善に向け学友会が活動を続けることは、今、医師になりたいと夢見ている未来の後輩達の役に立つと信じております。

最後になりましたが、学友会より新入生の皆さんのご入学をお祝い申し上げると共に、今後の学生生活が充実したものとなりますよう、心よりお祈り申し上げます。

刀城会館

水芭蕉

女性医師シリーズ　㊱

私の仕事

南福音診療所
吉住　幸子（昭40卒）

原稿依頼を受けあらためて医師免許証をいただいてからの年数を計算しました。厳しくもやり甲斐のあった46年間を顧み、静かな深い感動を覚えました。病弱で臆病な子ども時代をすごした私が、こんな人生に導かれるなど親族も知人も想像もしなかったことでした。

かけ出し時代に某有床診療所で働かせていただき、当直も致しました。ある夜女子中学生が一人で薬をもらいに来ました。きちんと挨拶も話も出来る子でしたが、歯肉の増殖が著明でした。抗けいれん剤によるものであるのは明らかでした。「忘れずに飲んで下さいね。」とカルテを薬局にまわして別れましたが、歯肉の印象が強く残りました。その２～３カ月後の当直の時、地味な服装で暗い顔をした婦人が小さい赤ちゃんを抱いて受診しました。話の様子から点頭てんかんで、既に発達の退行や吸啜力低下も始まっている様子でした。「午前中に来てきちんと検査と治療を受けて下さい。」と帰しましたが、その後会っていません。消え入りそうな婦人の姿が心にずっしり残りました。

小児科で多くの先輩に大変お世話になりましたが、特に医局長だった中島先生、講師の竹内先生には脳波の読み方やてんかん治療の手ほどきを受けました。

夫の転勤や子育てで医局生活がむずかしくなり熊谷小児診療所でパート医として働きました。一般外来の他に神経外来としててんかんを中心に診る機会を与えられました。同診療所では松戸クリニックの丸山先生に脳波検査を依頼していましたので、患者を診察し先生の脳波所見、病気の診断と処方はとても勉強になりました。後に週に１日、１年間研修に通わせていただきました。この間微細脳機能障害に力をそそいでおられた鈴木昌樹先生が病死されるという出来事がありました。丸山先生の同期生でした。

熊谷小児診療所の小林先生には小児科の筆一線での診療のノウハウを教えられ、誰からも学ぶ姿勢も教えられました。又熊谷で出会ったお母さん方には教えられることも多く沢山の感動と学ぶ意欲も与えられました。一人一人思い浮べながら感謝しております。

大学時代聖書研究部に属していた人たちで集り祈祷会を持っていました。その中で地域医療と無医地区医療を見ざして診療所を建てることになりました。石黒早苗・妙子両先生と吉住と私とで始動ということになりました。しかし熊谷の患者さん達をおいてやめることには抵抗感があり、しばらく二またをかけることになりました。ハンディを持つ子ども達の診療は北本で福音診療所を始めてからも続けています。

ここ10年余ADHDなど育てにくい子ども達のことが医学誌や学会で多くとり上げられるようになりましたが私の若い頃は半ば暗中模索でした。てんかん児を診療した保護者、時には教師からも相談を受けるようになりました。子供の問題点を話し合い、育てにくさが子どものせいでも親のせいでもないことから発していることを伝えました。「そういうことならわかる」という方もいました。ある学会で宮本信也先生の講演を聞き、多くの示唆を与えられ共感するところもあり、その後の診療は大分気持ちが楽になりました。面接の後、再診する親子に会うのが楽しみにもなりました。勿論良い結果ばかりではありませんが。

一般外来も1973年に福音診療所を開設してから診療する患者数や病気の傾向も年と共に変って来ました。最近では髄膜炎もめったに診なくなりルンバールもしばらくしていません。この冬はインフルエンザと軽症肺炎の流行で忙しい思いをしました。

大変だった子育ての時期は多くの方々にお世話になりました。私立保育園、母乳育児のために頼んだ個人の方たち、北本では保育園を併設しました。併設と言っても初めは個人の家で託児していた方に診療所の一部として貸切にしていただき、後に診療所施設の一部、そして別棟と変りました。石黒家４人吉住家５人と職員の子ども達も一緒に育ちました。有床の時は24時間体制もとりました。

夫をはじめ多くの方に支えられ能力に勝る人生を走り続けていることに感謝しています。

訪問インタビュー

東京女子医科大学

戸塚　恭一 先生 を訪ねて

山本　青葉（医学科４年）
遠藤　瑞貴（医学科２年）

去る３月27日、学友会執行委員３名で東京女子医科大学感染症対策感染症科教授の戸塚恭一先生を訪ねた。東京新宿区という大都会の中ではあるが、新旧多くの校舎が立ち並ぶ同大学からは落ち着いた小さな街のような雰囲気を感じた。インタビューは年度末のお忙しい中、約１時間半、お時間を頂き行われた。

学生：よろしくお願い致します。最初に現在のお仕事について教えてください。

先生：東京女子医科大学は平成４年に中央検査部の中に感染対策科が出来ました。これは大学病院では初めてのことです。それが中央検査部から独立して感染対策部感染症科になったのは平成14年でした。卒業時に内科系志望としか決まっていなかったので、内科系を一通りローテーションできる女子医を選びました。２年後には血液内科を専攻し、外部から来られた感染症の大先生に誘って頂き臨床中央検査部と兼任になりました。抗菌薬の薬物動態を主にやっていましたね。そこで臨床薬理学会の海外研修制度を紹介してもらい、抗菌薬の薬物動態・薬力学（PK-PD）を研究しているウィスコンシン大学のクレイグ先生の所に留学しました。その後、PK-PDの重要性が色んな分野で浸透して来ましたね。帰ってからは、マウスの感染モデルを用いて抗菌薬を投与したりと動物を使った研究を主にやってきました。

学生：先生は現在、治験審査委員などをされていますが、TPPと治験の関係についてはどうお考えですか？

先生：各国のレギュレーションが非関税障壁になっているという問題はあると思います。日本の治験は時間がかかりますし。各国の非関税障壁を取り払うのがTPPですから、日本の主体性が無視されたりする可能性はあると思いますね。

学生：日本の治験は時間がかかると言いますが、それは何故なのでしょうか？

先生：アメリカのFDAという機構は大変多くの人を雇っているので規模や処理能力が違います。日本では申請しても人員不足から調べるのに時間がかかって処理しきれません。それを改善しようと現在人員を増やしているところです。

学生：研究や各種委員会をやられていますが、先生が、今、興味を持たれていることは何ですか？

先生：今は専門家が少ない感染症診療、感染症対策への人員が求められています。関連の学会には感染症学会と化学療法学会、臨床微生物学会、環境感染学会などがありますが、それらの学会がリンクして、耐性菌の情報や去年話題になったアシネトバクターの院内感染について関連学会としての提言を行い、記者会見などを開くこともあります。日本の感染症対策は進んできていますが、まだまだ人が足りないですね。海外では感染症科のない病院はないが、日本では抗生物質の開発が進んでいたので一時は感染症科はなくてもいいという流れがありました。そのため発展しなかったんですね。これが耐性菌の増殖をもたらしたという面もあると思います。今は保険診療上の感染対策加算があるので何らかの形で専従・専任の医師を作らないといけないこともあるので、それがきっかけで増えて行くのではと思います。

感染症は慢性疾患ではないので、科として維持するのが難しいですね。我々の所は私の他に４人の医師と研修医２人、トータル７人が血液内科外来でHIV外来を行いながら、院内では年間約2000件のコンサルテーションを受けています。

学生：先程、基礎研究に人がたりないとおっしゃっていました。群大でもそう言った現状と聞きますが、女子医ではどうなのですか？

先生：昔は細菌学教室というのがありましたが、だんだん細菌学ではなく、免疫という分野に変わってきています。我々から見るとだいぶ感染症の分野でも基礎をやる教室が少ないと思っています。それだけじゃなくて基礎に行く人も少ないですね…。

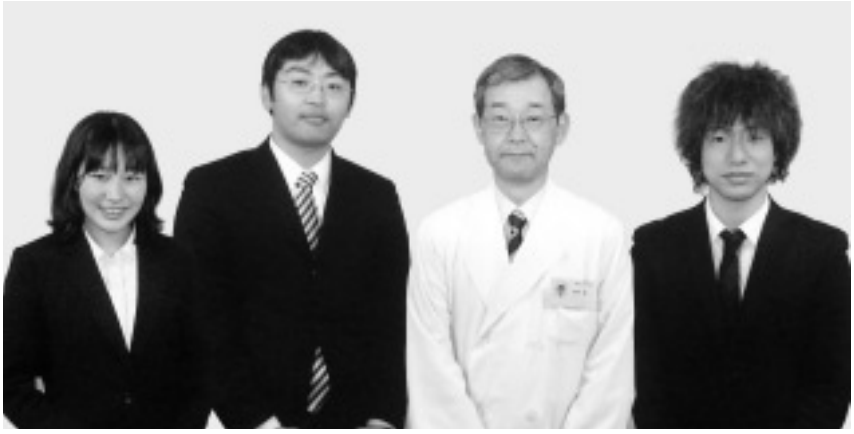
学生：先生としては、その理由についてはどうお考えですか？

先生：やっぱり基礎は地味だからこつこつやらなきゃいけないし、生活も大変だと思ってしまうのではないでしょうか。動物の感染研究などやっていると、

24時間研究室にいることもありますしね。１時間ごとに70匹のマウスに注射を打つという研究もあったりします（笑）。

学生：先生が基礎をやってこられた理由・魅力は何でしょう？

先生：実験のデータが想定通りに出た時の喜びですね。実験を通じて培われた考え方が、社会の中で役立つと考えています。色んな考え方を持つことができますしね。頭の中でこうじゃないかと考える習慣が、実験だけではなく、全ての物事に通じます。物事をどう考えるか、どう分析するかということでもありますね。



左から山本青葉、岩崎竜也、戸塚恭一先生、遠藤瑞貴

学生：先生は色んな役職を持っていらっしゃると思いますが、お忙しい毎日の中で、どうやって生活のサイクルを作られているのですか？

先生：やっぱり実験を本当にやっていたらできないなと思います。定年が近くなってくると教育や学会、委員会など、そういった仕事が多くなります。つまり、年代によって、これをやる時期、あれをやる時期、という風に役割が変わってくるということですね。全部を一気にはやれません。その時期その時期でやるべきことがあるので、それをしっかりやることだと思います。

学生：確かに年代によって役割はあると思いますが、SARSなど局所的に出てくる問題への対応はどう生活に組み込まれますか？

先生：その労力は大変ですよ。いろんな学会でも情報を流したりしますし、自大学への連絡・対策など、そこにかける時間は大きいです。国全体としても対策は必要だが、各病院でも対策を立てなければなりません。そして、対策立案されたら実施をできるようにしなければなりません。だいぶ前回の新型インフルエンザの教訓で対策は進んでいると思いますが、まだまだです。

学生：次に学生時代のことをお伺いしたいと思います。先生は何部だったのですか？

先生：サッカー部です。当時はあまり強い方ではなかったのですが、他大学からコーチを招き、内容を充実させて、私がキャプテンになったときに、東医体３位になり、全医体で準優勝しました。その翌年は東医体準優勝でした。今でも部誌に目を通しています。去年の４月にその当時の部員と同窓会をしたら、みんな集まってくれて何十年ぶりかの再会で大変楽しかったですね。

学生：他に部活での思い出はありますか？

先生：先輩後輩の関係もあるから、その中で人間関係等の苦労をしたことは良かったと思います。いかにサッカーで勝つかということも考えました。私が感じていたのは、負けても笑えるくらいの精神でないと駄目ではないかということです。でも先輩からは負けた時に笑っていたら、なに笑ってると言われたこともありました（笑）。本当に部を盛り上げるためには、試合に出てない人がどういう雰囲気でいるかということも重要だと思います。そういう経験は人生の役に立つと思いますよ。それに、相当鍛えたので体力には自信があります。女子医大でもサッカーチームをつくってやっていた時期がありました。いまはゴルフをやっています。妻と一緒に週に２、３回は練習に行くようにしています。

学生：大学生活の中でこれやっとければよかったなと思うことはありますか。

先生：そんなにないですね…（笑）。勉強以外にも色んな所に行って遊んでいましたからね。一年生のときは北陸、山陰、四国を電車で回ったり、４年生では車で九州まで行ったりしましたしね。

学生：最後に在校生にメッセージをお願いします。

先生：私は卒業して外の大学に出ましたが、群馬大学だけでなく広い視野を持って色んな場で活躍して頂ければと思います。また来年の６月５日、６日にはパシフィコ横浜で日本化学療法学会総会の総会長として日本感染症学会学総会との初めての合同学会を行いますので興味のある方は感染症の世界をのぞいてみてください。

パジャジャラン大学交換留学実習報告

群馬大学パジャジャラン大学交換交流プログラムに参加して

前原　由美（医学科６年）

群馬大学パジャジャラン大学交換交流プログラムの一環として、２月17日から２月25日にかけてインドネシアに滞在し、実習・見学を行ってきました。

このプログラムに参加し、日本とは異なる文化・経済状況の中で行われている医療に触れることができ、多くのことを考えさせられました。インドネシアでは患者さんはクラス分けされ、その階級に応じた病室・医療者からの治療を受けます。インドネシアに行く前にその話を聞いたときは、「信じられない」という気持ちでいっぱいでしたが、実際に都市部と村の生活の違いを目の当たりにし、これは単に医療制度を改善すれば解決するような問題ではないと痛感しました。インドネシアの都市部と村での生活格差は、日本で想像していた以上に大きく、このような環境の中で日本のような国民皆保険制度をおこなうのはほぼ不可能に違いないと感じました。パジャジャラン大学の倫理の先生との討論の中でも、医療者だけで解決できるような単純な問題ではないというもどかしさを感じました。一方、病棟見学の際には、医療設備・器具が十分でないなか、画像に頼らない診察などは、見習うところも多いと思いました。

また、このプログラムでは多くのパジャジャラン大学の学生とともに実習を行い、交流を深めました。彼らの実習に対する真摯な姿勢や高いモチベーションには感銘を受け、自分も見習わねばと触発されました。これまでなじみのなかったイスラム教圏の友人たちと過ごした時間は、私にとってかけがえのないものであり、イスラム文化やインドネシアの伝統に触れ、改めて日本という国について考える機会となりました。

このような貴重な機会を与えてくださった森川昭廣同窓会長をはじめとした同窓会の皆様、鈴木庄亮名誉会長、小山洋教授をはじめとした公衆衛生学教室も皆様、和泉孝志医学部長他諸先生方に心から感謝いたします。この経験を今後に活かしていけるよう、努力していきたいと思います。

パジャジャラン大学交換留学の感想

HOO CHIN KHANG（医学科６年）

今年２月下旬にパジャジャラン大学に交換留学をさせていただき、とても有意義な実習を行うことが出来ました。パジャジャラン大学付属病院を見学することで日本の医療との違いを実感できました。インドネシアでは感染症が未だ流行しており、数多くの患者が感染症を抱えているとわかりました。日本ではあまり見られないレプトスピラ症の患者も自分の目で見ることができました。

また、病院のエイズクリニックを見学させていただきました。その時、初めてHIV陽性の方と話すことができました。今までの実習ではプライバシー保護のためHIV陽性の患者と会うことができませんでした。疾患についてだけでなく、その方の人生について聞かせていただきとても貴重な経験でした。

そして、実習中に体調を崩してしまい、パジャジャラン大学病院の外来に受診することができました。先生の丁寧な、速やかな問診と診察を体験して感動しました。どの国の医者でも高い技能を有していると思いました。

一週間の実習を通して、インドネシアの医療、医学教育と文化について学ばせていただきました。今回の交換留学で得られた知識を生かしていきたいと思います。

パジャジャラン大学交換留学報告

藤田　真弥（医学科６年）

飛行機の窓に目をやると、水滴の横縞ごしに都市が見えてきた。雨雲の中を、それほど揺れることもなく、飛行機は雨期のバンドンへと降り立った。ムッと蒸し暑い。道路から溢れるほどの車とバイクが蛇行しながら走っていく。都市部を少し離れると、人力車や馬車がタクシーの代わりに道路を行き交う。真冬の日本から常夏のインドネシアへの道中、タイムスリップしてしまったかのようだった。

私たちの実習の拠点となったバンドンのHassa Sadikin病院は、パジャジャラン大学の学生が院内で迷うほど、大きな病院だった。インドネシアでは、経済状況によって患者がクラス分けされており、VIPと1stクラス～3rdクラスに分かれている。VIPは個室でテレビや冷蔵庫が完備されているが、3rdクラスでは、エアコンもなく蒸し暑い８人部屋だった。VIPエリアには、限られた担当医しか立ち入ることができない。医学生の実習では3rdクラスの患者が対象となる。

日本人の感覚では、貧富の差が露骨に医療へ反映してしまうことに抵抗があるが、それを非人道的だと非難することはできないと思った。インドネシアでは、村と都市との生活に大きな隔たりがあり、平等な医療を提供しようとするよりも、医療機関を受診するハードルを下げる方が、多くの人に医療が行き届く。また、医療は病院のみで行われるものではなく、Puskesmasという保健所のようなところでも、簡単な検査や薬の処方、歯の治療を受けることができる。さらに、農村では、地域保険活動にてPuskesmasから派遣された助産婦、ボランティア、医学生らによって妊婦検診や乳幼児検診が行われていた。

病棟実習や地域保険活動などにおいて、医学生は一医療者として戦力となっており、蒸し暑い病室の中で医学生はとても熱心だったのが印象的だった。自分のことを省みると、見学中心のポリクリと国家試験を中心にした勉強に甘んじているなと感じた。しかし、日本の医学生の実践力が低いことを憂うのではなく、患者への接遇を重んじる日本の医療を担う一因として病棟実習に参加したい想いを強めた。

群馬大学パジャジャラン大学 交換交流プログラムに参加して

狩野　萌（医学科６年）

この度、私は群馬大学パジャジャラン大学交換交流プログラムに参加させていただき、インドネシア、バンドン市にあるパジャジャラン大学及びその附属病院であるHasan Sadikin General Hospitalで実習をしてまいりました。ここに報告させていただきます。

私がインドネシアの医療で最も印象的だったことは、インドネシアでは所得の差によって受ける医療が５つのクラス（VVIP、VIP、1st、2nd、3rd）に分かれているということです。インドネシアに行く前は、どんなに貧富の差があろうともすべての人が同じ医療を受けるべきだと思っていましたが、実際に現地の医療を体験して、それは簡単な問題ではないのだなと実感しました。すべての人が受けることのできる3rdクラスの医療は、インドネシアの現在の社会状況の中で平等に提供できる最善の医療であり、日本でも同じ状況だったら医療にクラスができていたのかもしれないと思いました。自分が医療現場で働く前に、インドネシアでの実習を通して日本の医療について客観的な視点から考えることができたことは、大きな収穫となりました。

また、イスラム圏の人々と生活を共にすることで、信仰が日々の生活の中に自然に溶け込んでいる様子や食事、文化の違いについて深く体験することができました。日本で生活をしていたら、知らなかったことばかりで毎日が新鮮でした。一方、信仰や文化は異なっても、医療への向き合い方や趣味など共通するところも多くあり、それらを共有しながら過ごせたことは私にとって大変貴重な経験となりました。

最後になりますが、このような素晴らしい機会を与えてくださった同窓会の皆様、鈴木庄亮名誉教授、小山洋教授をはじめ公衆衛生学講座の皆様に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

小児科病棟にて（平成24年２月20日）

病院長室にて（平成24年２月20日）

医療人能力開発センターだより②

臨床研修センター
センター長　田村　遵一（昭57卒）

医学部附属病院医療人能力開発センター（以下本センターと略します）に対する、同窓会の日頃のご支援、ご協力にこの場をお借りして感謝申し上げます。

平成23年度には本センター関連のいくつかの動きがありましたので、ご報告します。

医学教育センターとの連携：医学科の入学定員増に伴い、任期付きではありますが教員が増員されました。そこで、教務委員会と教育業務を分担することにより、教育システムの改善を図ることになりました。また課題であった率前・卒後の一貫した教育体制の実現のため、医学教育センターと本センターの連携による新しい運営形態もスタートしました。少人数のスタッフですがお互いに兼任しあい、それぞれの運営に参画しています。社会の要請である良医の育成と、充実した地域医療の実現には、縦割り組織では不可能な、新しい発想での取り組みが必要です。

組織整備と人事：峯岸前センター長のもと、基本的な整備はすでに完了していましたが、社会情勢の変化に柔軟に対応するため組織整備を行いました。本センターは臨床研修センター、スキルラボセンター、女性医師等教育支援部門、地域医療推進研究部門（群馬県）と事務部門の五部門からなり、それぞれの役割を明確化し、必要に応じてお互い協力し合う体制としました。

臨床研修センター長には田村が就任しました。また同副センター長には、大山准教授の後任として菊地講師（医学教育センター）が就任しました。さらに専任教員として佐藤助教が参画してしいろいろなテーマに取り組んでいます。

スキルラボセンターの責任者としては、横濱准教授にかわり、坂入助教が就任しました。中山技官の協力のもと、利用者が大幅に増加しています。

女性医師等教育・支援部門長の永井准教授には本センターの副センター長もお願いしました。また、本センターは全職員のための教育センターであることを考慮し、塚越副看護部長にも本センターの副センター長に就任していただきました。同部門の現在の活動としては女性医師復帰、女性医学生支援を目的とした交流会、講演会等が中心となっています。一方看護職は人数も多く、また管理体制も看護部独特のものもあることから、看護師のキャリアアップ支援体制等、今後整備が必要となっています。

地域医療推進研究部門（群馬県よりの寄付部門）では鎌田准教授、羽鳥助教が群馬県と協力して、主に地域枠学生への支援を目的としたセミナーや研修会等の企画立案、実践に取り組んでいます。また、県内高校生向きの体験学習にも多大な努力を払っています。地道な活動ですが、将来群馬県の医療を担う人材育成が期待されます。

その他、医学教育センターとの連携を強化するために、坂本准教授（医学教育センター）も本センターの副センター長を兼任しています。同様に教育センター、さらに各診療科、診療部門の担当者も運営委員会委員としてご協力いただいています。

事務部門では、菊地係長にかわり、榎本係長がリーダーとして活躍しています。また、その他５名の各係員は引き続き各業務に取り組んでいます。

群馬県レジデントサポート協議会：初期臨床研修医を群馬県に集めることは緊急かつ最重要課題ですが、研修医の定員（採用上限）は各都道府県単位で指定され、県の主導で各病院に割り振られます。各研修病院がそれぞれ努力することは重要ですが、県全体で多くの研修医を採用しないと定員が増加しません。23年度からは県内16の研修病院が互いに協力して群馬県全体で研修を支援する体制をとりました。これが群馬県レジデントサポート協議会です。私が座長に指名されましたが、各病院が平等な立場で知恵を出し合い、協力して群馬県全体でより良い研修環境を整備し、より多くの研修医を採用することを目的としています。23年度に研修医による症例発表会等を開催し好評を得ています。今後も緊密な連携を図りたいと考えています。

今後の課題：地域医療の充実には人材確保が最重要課題であり、研修環境の整備と魅力的な研修プログラムの開発が必要です。この点については医師臨床研修制度そのものについての議論が必須となりますが、詳細は稿を改めて同窓会の皆様にお知らせしたいと思います。また。、専任スタッフの多くが時限つきのポストである点も問題です。解決を図るため大学全体で協議するとともに、同窓会の皆さまからもご助言を賜りたくよろしくお願いします。

重粒子線施設だより③

２年間で300名をこえる治療

重粒子線医学センター
教授　**大野　達也**（平５卒）

重粒子線医学センターでは、平成22年３月から本年３月までに、のべ306名の重粒子線治療を行いました。当初の計画では、スタッフの育成、プロトコールの準備状況、年２回の装置の点検、第４治療室の整備など、様々な事情を考慮して２年間で200名程度の治療を想定していました。昨年は、震災後の計画停電の影響で新規受付を止めた時期があったことや臓器責任者が複数交代した事情も考慮すると、センターのスタッフ一同がよくがんばった結果であると思います。同時に、重粒子線治療の円滑な運営と新規治療法の開発に対して、医学部附属病院や大学本部、群馬県などから多くの支援を頂きましたことに心から感謝申し上げます。

これまでの疾患別の内訳は、前立腺癌が227名と多く、次いで肺癌23名、頭頸部腫瘍18名、肝細胞癌18名、骨軟部腫瘍12名、リンパ節再発５名、直腸癌術後骨盤内再発２名、小児骨軟部腫瘍１名となっております。地域別には群馬県内からの患者さんが195名、次いで埼玉県44名、長野県19名、栃木県23名、その他25名となっており、最近の傾向としては、前立腺癌以外の疾患が相対的に増えていることと、県外からの紹介が徐々に増えていることが挙げられます。当センターでも、各医療機関と患者さんに対し適切な情報提供ができるように、がん治療の専門家ならびに一般向けの資料を作成して配布を始めました。

平成23年度は主に３つの装置側の改良が行われました。①ビームの最大エネルギーが４月以降380MeVから400MeVになり（薬事承認）、より体の深いところまでビームが届くようになりました。②照射野の形成法でらせんワブラー法が８月から新規導入され（薬事承認）、ビームの利用効率が改善されました。これら２つの技術改良の結果、昨年度はビームが届かないために断る方はいませんでした（初年度は４名の患者さんがビームの飛程不足で適応外となりました）。③積層ボーラス作成機が稼働し、これまで６社の外注で行っていたボーラス（体内で腫瘍形状に合わせてビームを止めるための器具）の作成を自施設でも製作可能となりました。これにより、３日間要していた製作期間が１日に短縮され、より迅速な対応が可能となりました。

本号では、群馬大学における重粒子線治療の適応について紹介したいと思います。まず、各疾患に共通の原則は、①病理学的に「がん」と診断されている（肝細胞癌を除く）、②計測可能な病変である、③広範な転移がない、④治療部位に対する放射線治療の既往がない、⑤本人に病状が説明されており、かつ同意能力がある（小児の場合は代諾者）、となっています。疾患ごとの主な適応は以下の通りです。括弧内は照射回数と治療期間です。

頭頸部腫瘍（16回／４週間）：主に腺癌、肉腫、悪性黒色腫などの腫瘍（非扁平上皮癌）で原則としてリンパ節転移がないこと。治療後に一過性の皮膚炎や粘膜炎がおこりますが、治療期間中の食事摂取などは良好です。なお、悪性黒色腫では化学療法を同時併用します。

肺癌（４回／１週間）：臨床病期Ⅰ期の非小細胞肺癌で、手術非適応例、または手術拒否例が対象です。

肝細胞癌（４回／１週間）：肝臓内の同一部位に限局しており、Child-Pugh分類がＡまたはＢであることが条件です。TACEでの局所効果不良例やラジオ波で治療困難な部位の症例が多くなっています。

前立腺癌（16回／４週間）：リンパ節転移や遠隔転移がないこと、病理組織学検査によるGleason Scoreや生検前のPSA値が明らかであること。当センターの約半数は高リスク群の方です。

直腸癌術後骨盤内再発（16回／４週間）：手術後の骨盤内再発のうち、吻合部再発以外の症例。腸管への線量軽減を目的に手術を併用する場合があります。

骨軟部腫瘍（16回／４週間）：主に体幹部の骨軟部腫瘍。治療部位に血管内腫瘍塞栓や金属などの人工物がないこと。これまで最も多い組織型は悪性線維性組織球腫と脊索腫でした。

小児骨軟部腫瘍（16回／４週間）：対象は骨軟部腫瘍に準じますが、年齢は６歳以上16歳未満です。通常の放射線治療や化学療法に抵抗性で６ヶ月以上の予後が期待できることが条件です。こちらは、現在、治療費用の負担を低減しています。

リンパ節再発（12回／３週間）：１部位のリンパ節再発で他の再発病変はないこと。原発巣に対する治療法は手術でも放射線治療でも可能です。消化器癌や婦人科癌で、大きさが２㎝を超えて周囲には腸管が接している腫瘍が多くなっています。

頭蓋底腫瘍（16回／４週間）：主に脊索腫、軟骨肉腫、髄膜種などの腫瘍。手術後の残存も可能です。

当院への紹介に際しては、「初診予約申込書」を病院ホームページからダウンロードしていただき、FAXにて予約を取っていただく仕組みになっております。現在のところ、前立腺癌を除き受診までは1-2週以内となっています。病状でご不明な点は、群馬大学重粒子線医学センター外来027-220-7891までお問い合わせください。

学会報告（同窓会補助）

国際原子力機関（IAEA）アジア地域協力トレーニングワークショップ「医学画像による高精度放射線治療（泌尿生殖器腫瘍）」を開催して

腫瘍放射線学
教授　中野　隆史（昭54卒）
トレーニングワークショップ世話人

国際原子力機関（IAEA）アジア地域協力トレーニングワークショップ（野田真永事務局長）が、本年３月５日から９日までの５日間に渡り、群馬大学医学部において群馬大学及びIAEAの共催で開催された。このワークショップはIAEAの原子力平和利用のアジア地域活動の医学・医療領域のプロジェクトとして開催されているものである。今回は、アジア地域13カ国から23名、国内から２名の放射線治療専門医ならびに医学物理士が選抜され参加した。５日は、講義開始に先立ち、主催者として、和泉医学系研究科長ならびに外務省総合外交政策局国際原子力協力室羽鳥隆室長から、来賓として元ベトナム大使、服部則夫様からスピーチを頂いた。

これまでのワークショップではアジア地域で患者数が多く、高精度の放射線治療が必要な子宮頸癌と前立腺癌の放射線治療に特化した講習を行った。講義は各臓器癌の放射線治療の第一人者の国内講師陣により、まず、各臓器の解剖学、病理学、放射線生物学の基礎的知識の講義から始まり、放射線治療に必要な医学物理、品質管理、各臓器がんの画像診断におよび、外部照射における医学画像の利用、IMRT治療法、線量分布の作成方法、線量分布の評価方法などの講演が行われた。さらにこの２臓器がんは小線源治療が重要な治療法でもあるところから、画像誘導小線源治療の先端的治療技術の教育講演が行われた。８－９日には東京のエレクタ社の研修所に移動し、治療計画装置を実際に使い、治療計画実習が行われた。最終日（９日）には、講義内容についての履修試験が行われ、終了証書の授与式を行い、すべての日程を終了した。

当ワークショップは、来年度も対象臓器がんを変えてアジア各国での持ち回りで開催されるが、私が本プロジェクトのリードカントリーコーディネーターを務めていることもあり、腫瘍放射線学教室では、今後とも引き続き、アジア地域の放射線治療の中心的施設としてIAEAの活動に積極的に協力し、アジア地域の医療の発展に寄与したいと考えている。

学会報告（同窓会補助）

北関東・甲信越ペインクリニック学会第１回学術集会を開催して

麻酔神経科学
教授　齋藤　　繁（昭61卒）

群馬大学大学院医学系研究科脳神経病態制御学講座麻酔神経科学分野では、これまで、手術麻酔・集中治療医学・疼痛学・ペインクリニック・環境医学などに関して臨床的および基礎的研究を続けて参りました。術後痛を中心とする急性痛に対する診療、神経障害性疼痛などの慢性痛に対するペインクリニックなども、そうしたプロジェクトの一環として実施しており、現在までに国内外の専門誌にその成果を報告しております。今回、これまでの活動内容をご評価頂き、北関東・甲信越ペインクリニック学会第１回学術集会（日本ペインクリニック学会北関東甲信越地方会2011年度学術集会）を主催させて頂きました。この学会は、北関東甲信越エリアにおいてペインクリニックの臨床ならびに基礎研究に従事する医師ならびにパラメディカルスタッフにとって学術交流の中核をなすものです。

本会の前身は日本ペインクリニック学会北関東地方会で、通算開催回数は当該年度で第14回となります。また、今回は、日本ペインクリニック学会地方会組織改編計画に基づき、甲信越・茨城・千葉地区を加えての開催となり、その記念すべき第１回となりました。会場は、構成する各都道府県から交通アクセスのよい埼玉県さいたま市大宮ソニックシティー国際会議場ほかとし、開催日はこれまでの慣例に従い、３月前半の2012年３月11日（日曜日）と致しました。当日は東日本大震災発生から丁度１年にあたりましたので、演題発表を一時中断し、発生時刻の14時46分に参加者全員で犠牲者を悼み黙祷を捧げさせて頂きました。そして、北関東甲信越地区でペインクリニック診療に従事する100名を超える医師やパラメディカルの方々にご参加頂き、有意義な情報交換を行うことができました。

この会の開催にあたりましては、群馬大医学部同窓会から様々なご支援を頂きました。会を代表して深く御礼申し上げます。

支部だより

太田館林邑楽郡支部便り

支部長　**成田　忠雄**（昭36卒）

本年３月５日（月）館林市ジョイハウスにて支部役員会が開催されました。役員の内、22名が出席しました。事業報告では昨年の総会は３月25日に予定されていましたが、東日本大震災で中止されましたので、会報を12月１日に発行し、地区会員85名に郵送した旨報告されました。

本年度は支部長改選の年で、現支部長は退任し、新支部長に関口利和先生（関口医院内科）（昭和37年度卒）を推薦することが決まり、了承されました。この人事は本年６月～７月頃開催予定の総会で承認を受けて新たな支部組織が発足することになります。それまでの間は現役員が業務を続けます。

新幹事に川田敏夫先生（川田クリニック）（昭和62年度卒）が推薦されました。川田先生には支部事務局の業務を担当してもらうことになっております。

昨年当支部で下記３人の先生方が国の表彰をうけられました。今回の役員会には、そのお祝いのために森川昭廣群馬大学医学部同窓会々長が特例で参加して下さいました。

表彰受賞者

増村雄二郎　先生
　瑞宝双光章　保健衛生功労
有坂　　實　先生
　学校保健および学校安全　文部科学大臣表彰
杉田　安生　先生
　社会福祉功労　厚生労働大臣表彰

増村雄二郎先生は昭和29年卒、現在の県立がんセンター病院の前身、東毛病院の院長を長く勤められ、退官後は増村医院を開設し、医師会の結核予防事業の先頭に立たれてご尽力されました。平成18年には秩父宮記念結核予防事業功労賞を授与されております。今回の受賞はこの賞の延長線上にあるようです。

また森川刀城クラブ会長より昨年12月より始まった、同窓会財政基盤強化協賛金についてのお話があり、当支部としても会員に寄付を呼びかける活動を総会等の機会を通じて行うことを、今年度の活動方針に盛り込みました。

星野富弘
「花の詩画コーナー」
―ありがとう　私のいのち―

院内に開設されました（平成24年４月７日）

クラス会だより

昭和33年卒
竹の子クラブ同期会開催

川上　哲男（昭33卒）

平成23年11月５日（土）～６日（日）、軽井沢プリンスホテルにて、昭和33年卒同窓会を、群馬県在住者が幹事で開催しました。

我々のクラスは居住者の多い地区、つまり東京、神奈川、群馬の３地区で毎年交代で会を開いております。平成23年度は群馬の順番に当り、クラス委員神山照秋君（在渋川）と飯島耕作君（在高崎）を中心に県内在住者が高崎メトロポリタンホテルに集って、４回準備会（常時10人前後出席）を開き、協議を重ねて準備を進めました。

先ず開催場所として四万温泉と軽井沢プリンスホテル等が話題に上りましたが、ホテルが駅前に在り、交通至便とゴルフも出来る等の利点で、上記軽井沢プリンスホテルに決まりました。日時に関しては紅葉の軽井沢を味わってもらおうとして、綿秋の季を選びました。

因に、竹の子クラブの名称は東京麻布十番で開業していた故荻野彰君の提唱です。つまり、昔から経験が浅い医者を指して「竹の子医者」と呼んでいた所から名づけ、将来若い竹の子が立派な孟宗竹に成長する事を願っての命名と荻野君から聞いておりました。我々のクラスも年齢が既に80歳前後となり、卒後50年余を過ぎ、各人それぞれ立派な竹に成長したようですが、老竹になりました。今回の軽井沢には20名の同窓が集い旧交を温め合いました。

次に、簡単な式典と宴会の模様をお伝えします。司会進行をクラス委員の神山君にお願いしました。更に開催と歓迎のあいさつをクラス委員の飯島君が行いました。更に金子由之助君（在高崎）からクラスの経理状況の説明があり、次いで明日のゴルフコンペに就いての説明を神山君、ホテル周辺の散策に就いて松本淳君（在前橋）、軽井沢には美術館が結構多く、当地の美術関係の情報の紹介を塚田譲君（在前橋）が行いました。

以上流れるように簡単な式典が終り、当地で医師会長を務めている中島敏君（在長野）の乾盃で酒宴に移りました。昨年のホテルオークラから１年振りの再会を祝して盃を上げたり、久し振りの出席で挨拶を交したり、にぎやかな酒盛りの一時が晩秋の軽井沢の夕闇の中に静かに盛り上りました。しばらくして、永島勇君（在前橋）から母校の近況を伝えて頂き、又当地の医師会長中島敏君の司会者からの指名発言で、ユーモア溢れる話に一同爆笑と更に塚田久雄君（在神奈川）以下何人かの人の近況発言がございました。

お酒が回った所でクラスのムードメーカー西形雄次郎君（在高崎）がギターを持って登場、自作の「竹の子ソング」を披露し、万雷の拍手を頂きました。竹の子ソングの一部を紹介します。

『今じゃ時めく病院の院長先生であるけれど、元を糺せば竹の子で、ビーコン食らった事もある』とか。『今じゃシガナイ町医者の老いぼれドクターじゃあるけれど、元を糺せば竹の子で天を目指した事もある』。以前にも紹介した歌詞ですが、働き盛りの若い時や、天を目ざしていた時代を、今や大きく過ぎ去った80歳前後の老医にはチヨピリペーソス

昭和33年卒クラス会（平成23年11月５・６日　軽井沢プリンスホテル）

後列左より、神山照秋、飯島耕作、松本淳、青木謙二、金子由之助、川上哲男、塚田譲、安戸一皓、永島勇、鈴木博
前列左より、桜井省吾、奈良圭司、小林暉佳、加藤友之、中山欣司、中島敏、湊正、松岡正紀、塚田久雄、西形雄次郎

が効いて面白かったが、チョコト笑いの中に哀愁が滲んでいましたか？、私の錯覚でしょうか？。

最後に、来年の担当である神奈川を代表して、湊正君（在八王子市）が登壇し、挨拶をして閉会になりました。

おみやげに「峠の力餅」を付けました。昔、碓氷峠の険しい山道を乗り切るためにこの餅を食べて登ったそうです。我々の同窓もポチポチ80歳の山に近づいてきました、元気に乗り切ることを願って、おみやげにしました。

後日、慰労と反省を兼ねて県内在住者が集りました。少し遠方の地軽井沢での開催で比較的盛会だったのは、新幹線を降りて目の前に会場があったと言う交通至便がよかったとの意見が多数だった事も付記しておきます。

昭和59年卒クラス会

山田　弘徳（昭59卒）

平成24年、４月28日、東京駅近くのフランスレストラン（レゾナンス）で、59年卒クラス会が開催されました。50歳を超えた２年前の高崎のクラス会から、２年ごとに、群馬と東京とで交互に会を開催しようということになり、今回は、東京での開催となりました。ゴールデンウィーク前の土曜日にもかかわらず、遠方からも、約半数の50名という大勢の同級生が集まりました。今回は、前回の高崎でのクラス会と打って変わって、立食形式で、堅苦しくなく、和やかな雰囲気でスタートしました。

今回初めて参加する人も多く、各々の近況を伝えてもらいました。我々の年代になると、大学に残っている者、勤務医をしている者、開業している者、それぞれの仕事の内容が大分違ってきています。しかし、皆、一人ひとり、重要な立場に立って活躍しており、社会的に大きな役割を担って、さまざまな貢献をしています。

話題は尽きず、酔いも回って、宴が盛り上がったところで、次は、ガード下の近くの居酒屋で二次会ということになりましたが、９時を過ぎていたにもかかわらず、ほとんど帰る人も少なく、40名以上が二次会に移動しました。居酒屋の我々の一角はまさに、前橋での学生コンパを思い起こさせるような、30年前の大学時代に時間が後戻りしたような雰囲気に包まれていました。話題も学生の頃の思い出の話で盛り上がり、皆、普段、日頃の緊張から離れて、楽しいひと時を過ごすことができました。あらためて、学生時代の仲間のすばらしさ、大切さを知ることができた同窓会でした。

次回、２年後は、卒業30年目の節目のクラス会となることもあり、地元群馬、伊香保温泉で開催しようということになりました。

皆さま、大変、お疲れさまでした。受付、司会、写真などを手伝ってくれた方々、ご苦労さまでした。次回、伊香保での再会を心から楽しみにしています。

なお、クラス会で、同窓会の財政基盤強化協賛金の御案内をさせていただき、複数の寄付をいただいたので、御礼かたがたご報告申し上げます。（財務委員　小山徹也　S59）

昭和59年卒クラス会（平成24年４月28日　丸の内レゾナンス）

平成５年卒クラス会兼 大野達也君の教授就任祝い報告

橋本　貢士（平５卒）

我が国の状況が一変した東日本大震災より１年が経とうとした３月３日土曜日にホテルメトロポリタン高崎に於いて平成５年卒のクラス会が開催されました。前回のクラス会は２年前に行われ、まだ日が浅かったのですが、今回は我々の学年から待望の初めての教授誕生とあり予定を早めて教授就任祝いを兼ねての開催となりました。吉報を受けたのは昨年夏。同級生の大野達也君が、本学が世界に誇る群馬大学重粒子線センター教授に選出されたのです。震災の後の様々な自粛ムードの中、久しぶりのうれしいニュースでした。遠くは高知から集まった同級生は総勢36名。中にはお子さんを連れて一家で参加の者もいました（前野君夫妻）。17時、高柳君の名司会に会は始まり、大野君と同じ準硬式野球部でかつ放射線科同期（かつ同い年）の北本君の祝辞のあと、「大野教授」から重粒子線治療の最先端の内容でありながら、門外漢にも分かりやすいレクチャーを頂き、またその中で群馬大学の現状にも触れていただきました。卒業以来、母校を訪れたことのない者もいて、新調された講義棟や院内のアメニティーモールなどのスライドに驚嘆の声が上がりました。同じく準硬式野球部だった鈴木秀喜君は大野君との思い出として学生時代の懐かしい（ちょっと恥ずかしい？）写真を音楽とともにDVDに編集し上映してくれましたが、そのプロ顔負けの出来栄えに一同感動でした。青春時代への一瞬のプレイバックを経験させてもらいました。また勤務先の土浦の病院で震災に被災した若井（旧姓酒井）さんや遠く高知から来てくれた林君から近況報告があり、その元気さにみんな心打たれました。最後に大野君へ岡田（旧姓足立）さんから花束贈呈があり、大野君の教授としての益々の活躍と群馬大学重粒子線センターの更なる発展を祈念して、一次会はお開きとなりました。二次会は高崎駅一階のキリンシティへと河岸を変え、新たな参加者も加わり専らクラス会モードとなり、夜10時過ぎまでビール片手に昔話に花が咲きました。昭和62年春、国公立大ダブル受験、初の群大医学部推薦入試、群大医学部一般入試から理科が廃止され、余りの高倍率に面接試験の待機場だった基礎大講堂が溢れかえった年に入学した我々のクラスも今年は卒後20年目にあたります。地域医療に貢献する者、基幹病院に勤務医として活躍する者、診療所院長、副院長となる者、他大学病院や研究機関に勤務する者、医療とは異なる夢を追う者、そして母校群大に残っている者と皆様々なキャリアパスを歩んでいます。子供の教育、親の介護の話題も多く出ました。感じたのは40代も半ばになり皆苦労しながらも、懸命に生きているということ、そしてクラスの団結力の強さでした。東京にいながら同級生の消息をあらゆる情報を駆使して把握し、多数の同級生を集めてくれた前島君、一次会、二次会の会場設営を一手に引き受けてくれて、またその準備の周到さに舌を巻いた天野君には本当に感謝しています。彼らの力が無ければこんなに盛会にはならなかったでしょう。次回はまた２年後ということで、再会を誓って別れを惜しみながら三々五々散会となりました。また大野君に続く新しい教授が誕生し、「こないだクラス会したばっかりじゃない?!」っていう「不平」が出ることを大いに期待して。

平成５年卒クラス会（平成24年３月３日　ホテルメトロポリタン高崎）

最後列（左から）前島、蘇原、尼崎、清水、橋本、北本、杉山、高柳、砂長
２列目（左から）登坂、林、大谷、富澤、鈴木（秀）、市場、有沢、神谷、前野、松村
最前列（左から）一色（旧姓管野）、岡田（旧姓足立）、寺尾（旧姓武田）、若井（旧姓酒井）、掛水（旧姓山田）、大野、山崎（旧姓清水）、前野（旧姓桑子）、天野（旧姓齊藤）、川口（旧姓石川）、水越（旧姓斉藤）（敬称略）

群馬健康医学振興会が一般財団法人に生まれ返りました

一般財団法人群馬健康医学振興会
理事長　**山中　英壽**（昭39卒）

ご存知のように、平成20年12月１日から施行された公益法人改革３法により、我が国のすべての財団法人は平成25年11月30日までに、公益財団法人か一般財団法人のどちらかに移行申請を行わなかった場合には自動的に解散となることになりました。わたくしどもも常務理事会、役員会を幾度となく開催し、慎重な検討の結果、一般財団法人の道を選択しようということになりました。振り返りますと、群馬健康医学振興会は群馬大学医学部同窓会・刀城クラブ会員有志が中心となって、昭和54年12月25日に群馬県より認可された財団です。先輩諸氏の尽力により、群馬健康医学振興会は群馬県民の健康増進に寄与することを目的として諸事業を展開してきましたが、平成24年４月１日より当財団は一般財団法人に衣替えをいたしました。一般財団法人群馬医学振興会は別表のような陣容で出発することになりました。今まで諸先輩によって培われてきました当財団の伝統は守りつつ、公益性の高い諸事業をさらに推進し、展開して行きたいと考えております。すなわち、群馬大学医学部同窓会員の直接的利益だけを考えるのではなく、広く地域住民の健康福祉に還元できる事業を諸事業の中で展開していきたいと思っております。その意味では、群馬健康医学振興会が推進してきた健康医学ガイドシリーズとして行われてきた書籍シリーズは、引き続き行ってまいりたいと思います。また、保健・医療・福祉の分野に携わっている若い前途ある人々に選考委員会の厳正な判断のもとに、研究助成金をお渡しするという事業も、引き続き当財団の事業の大きな柱として展開していきたいと思っております。すなわち、当財団は、地域の住民のみなさんに現在氾濫している医療情報の中から正確な医療情報を公開・伝達するという役割と近い将来、地域の保健・医療・福祉の分野で中心的役割を担う若い人々を発掘し、育成することを２大柱として、一般財団法人としての活路を見出していきたいと思っております。さらに、群馬健康医学振興会を発展させるためには、財政基盤を強固なものにしなければならないことは言を俟たないところですが、数年後の公益財団法人の認定を目指して、今から、より公益性の高い諸事業を展開していきたいと思っております。

一般財団法人群馬健康医学振興会

【評議員】

役職名	氏名	卒年
評議員	金子達夫	昭53
〃	小山洋	昭56
〃	猿木和久	昭53
〃	福田利夫	昭51
〃	山田邦子	昭44
〃	横江隆夫	昭52

【役員】

役職名	氏名	卒年
理事長	山中英壽	昭39
常務理事	白倉賢二	昭50
〃	柳川洋子	昭44
理事	岡田恭典	平３
〃	木谷泰治	昭41
〃	鈴木忠	昭45
〃	竹吉泉	昭57
〃	田村遵一	昭57
〃	永井伊津夫	昭43
〃	長嶋起久雄	昭44
〃	根本俊和	昭39
〃	森川昭廣	昭44
監事	鈴木庄亮	昭37
〃	梅枝定則	昭46
顧問	饗場庄一	昭31
〃	奈良純夫	昭31
事務局長	望月教弘	
事務職員	五十嵐佳子	

同窓会財政基盤強化協賛金 ご協力の御礼とお願い

財務委員長　**梅枝　定則**（昭46卒）

会報第224号にて協賛金にご賛同いただきました皆様方のお名前を報告させていただきました。ご協力に心より感謝と御礼を申し上げます。

協賛金は会報第223号に掲げました同窓会の活動方針を継続していくために是非共必要なものです。会員の皆様には引き続きご厚情を賜りますようお願いいたします。

皆様方のご健勝とご活躍を祈念しております。

なお、平成24年５月18日現在、305名と法人等３件から、7,500,000円の協賛金をいただきました事をご報告させていただきます。

同窓会財政基盤強化ご賛同者一覧（平成24年３月16日～同年５月18日までのご賛同者）

卒年	ご芳名(敬称略)	卒年	ご芳名(敬称略)	卒年	ご芳名(敬称略)	卒年	ご芳名(敬称略)
昭29卒	清水　卓造	昭40卒	杉田　安生	昭52卒	合志　裕一	〃	土屋　清隆
昭32卒	石倉　秀昭	昭42卒	一ノ瀬岩夫	〃	今　陽一	昭63卒	大山　良雄
〃	小暮　正久	〃	島野　俊一	昭53卒	池田　一	〃	佐口　幸利
昭33卒	青木　謙二	〃	黛　卓爾	〃	出口　健二	平２卒	野口　幹正
〃	小林　暉佳	昭43卒	有坂　實	〃	村上　博和	〃	藤田　尚
〃	永島　勇	〃	小島　章	〃	義江　健	平３卒	福良　治彦
昭34卒	伊藤　琢夫	〃	深沢　逞太	昭54卒	浦部　延子	平５卒	日野原　宏
〃	大木　一郎	昭44卒	杉山　和子	昭55卒	林　仁薫	平９卒	佐々木　靖
〃	中村　善寿	〃	横山　芳信	昭57卒	安部由美子	平11卒	村上　順平
〃	船渡川誠一郎	昭45卒	福田　敬宏	〃	鹿沼　達哉	平15卒	米田　尚弘
昭35卒	石川　博義	昭47卒	中里　洋一	〃	宮坂　牧宏	平20卒	小松　恵
昭36卒	青木三重子	昭49卒	佐々木豊志	昭58卒	荒川　浩一	〃	矢澤　慶一
〃	釼持　公夫	〃	宮城　修	〃	山田　正信	平21卒	茂木　伸介
〃	田中　卓	昭50卒	須永　吉信	昭59卒	五十嵐　康		
昭37卒	関口　利和	〃	矢野新太郎	〃	栗原みどり	大学院	飯島　久香
昭38卒	境野　宏治	昭51卒	高橋　逸夫	〃	土屋　清志	〃	小林　力
昭39卒	吉野　和也	〃	福田　利夫	昭61卒	岡部　和彦	桐生支部会	

群馬健康医学振興会 助成金のご報告

一般財団法人群馬健康医学振興会
常務理事（研究助成金担当）
白倉　賢二（昭50卒）

群馬健康振興会の研究助成は財団の公益事業の柱となるもので、24年度の助成で３年目を迎えます。この助成金は地域の健康増進のために行われる研究、事業が対象で医師のみならず医師以外の研究者、大学院生、地域の医療職などに交付されます。本年度は以下の８件の課題が採択されました。今後も財団の活動にご理解とご協力をお願いいたします。

平成24年度 群馬健康医学振興会助成金受給者

研究・事業題目　　研究者名（五十音順）

１．高齢者の大腿骨頸部骨折後の追跡調査
　前橋協立病院回復期リハビリテーション病棟
　内川　千恵

２．日本語教育指導及び日本文化振興事業　看護師及び介護福祉士の国家試験対策事業
　NPO法人イメージ・オブ・ライフ　大川原良雄

３．SUN学塾IN群馬　群馬県内における自閉症支援者（医療・福祉・教育）自助学習活動ならびに地域啓発活動
　群馬大学大学院医学系研究科小児生体防御学
　岡田　恭典

４．群馬県における整形外科リウマチ治療ネットワークの設立
　群馬大学医学部附属病院整形外科　岡邨　興一

５．スポーツ選手の早期競技復帰および障害・外傷予防のための群馬県内のアスレティックリハビリテーションネットワークの構築
　群馬大学医学部附属病院リハビリテーション部
　武井　健児

６．他者とのコミュニケーションを苦手とする対象者に対し、対話を用いながら運動に取り組ませることによる効果を身体的、精神的な側面から調査する
　学校法人平方学園　明和学園短期大学
　永井　真紀

７．群馬県内の保健人材の現状・ニーズに則した医療教育の向上に関する研究
　群馬大学大学院保健学研究科生体情報検査学
　松井　弘樹

８．反復性肩関節脱臼における肩甲上腕関節の関節接触圧と接触領域―新鮮凍結屍体肩を用いた術前・術後のシミュレーション―
　群馬大学医学部附属病院整形外科
　山本　敦史

同窓会ホームページ リニューアルのお知らせ

広報委員長　**白倉　賢二**（昭50卒）

同窓会創立60周年と群馬健康医学振興会の一般財団承認を機に、ホームページのリニューアルを行いました。同窓会報が長年にわたり定期的に発行されておりますが、昨年の東日本大震災では、被災地の会員の安否についての問い合わせが数多く寄せられ、迅速な情報提供の重要性が改めて認識されました。その反面、インターネットによる情報提供には世界に無差別、瞬時に伝達される危うさがあり、個人情報の取り扱いなどホームページの運用には会報の場合と異なる細やかな配慮が必要です。

この利便性と危険性を考慮し広報委員会ではホームページ運営委員会を発足させ、新たなウェブサイト構築について昨年より検討を開始いたしました。先ずは同窓会と財団のホームページへの入口を同格に配列し、トップページからどちらにもアクセスできるようにいたしました。さらに古い資料や写真を整理し、最近２年間のもののみを掲載することといたしました。大学の近影は手元のものを掲載し、今後新たに季節ごとに撮影し差し替えていく計画といたしました。過去の資料は必要があれば引き出せるようにコンテンツの中のアーカイブズに収納いたしました。

また受け付け窓口を設け、会員からの連絡、写真、支部会便り、クラス会便りなどの投稿を受け付け、関係者及び運営委員会、広報委員会の承認を得て掲載することといたしました。私的な写真や記事はPDFファイルとして外部からの転用を制限し、大学の写真などは会員が学会や講演で利用出来るようなデータとして掲載いたしました。

現在、会報は年４回発行されておりますが、ホームページについてはインターネットの特性を生かして、皆様の提案があれば迅速な対応が図れるような運用を考えております。さらに年１回程度広報委員会を開いて適宜に内容の検討を行いたいと考えております。ご意見、ご提案があれば同窓会事務局にご連絡頂ければ有難く存じます。

財団は３年後の公益法人化を目指しております。同窓会活動とは一線を画して、近隣住民の健康のための公益活動を行ってゆくために、将来は財団のホームページについても独立したものにしたいと考えております。この度のリニューアルは公益法人化へのステップとしてご理解を賜りたいと考えております。

群馬大学医学部同窓会刀城クラブ 創設60周年を迎えるにあたって

医学部同窓会・刀城クラブ
会長　**森川　昭廣**（昭44卒）

会員の皆様には益々御清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、本年は、同窓会刀城クラブが創設60周年（いわゆる還暦）を迎え、会報第223号にて「平成24年開催の同窓会総会日程に合わせて、刀城クラブ創設60周年記念事業の実施」をご案内しているところであります。

これを機会に医学部同窓会・刀城クラブの意義、大学へどのような貢献をすべきなのか、また会員相互の親善をいかにすすめるのかを一度考え直し、来たるべき10年、20年に向かって活動の基盤を再構築することを考えています。

そこで、この度、刀城クラブ60周年記念事業実施準備委員会を発足し、検討を重ねた結果、同記念事業といたしまして、隔年開催している「教授の会」と「全国支部長・代表者会議」を合同で開催し、他大学の医学部同窓会理事等の先生から講演を頂き、更に、その他に会員の方からもお話を頂く予定となっております。

また、刀城クラブ創設60周年記念祝賀会では、本年一般財団法人に移行した群馬健康医学振興会のお披露目も同時に行いますので、会員の先生方におかれましては、多数お誘い合わせのうえ、ご出席くださるようお願い申し上げます。

群馬大学医学部同窓会・刀城クラブ「総会」と「医学部同窓会刀城クラブ創設60周年記念事業」のご案内

１．「総　　会」

⑴　日　時　平成24年10月27日（土）17：00～
⑵　場　所　医学部刀城会館
⑶　議　題
　第１号議案　平成23年度事業報告について
　第２号議案　平成23年度会計決算報告について
　第３号議案　平成24年度事業計画について
　第４号議案　平成24年度会計予算案について
　その他
　　１）地域医療貢献者の表彰
　　２）推薦講演者への感謝状授与
　　３）その他

２．「群馬大学医学部同窓会刀城クラブ創設60周年記念事業」

⑴　記念植樹式
　【日　時】平成24年10月27日（土）15：00～
　【場　所】医学部刀城会館前
⑵　教授の会、全国支部長・代表者会
　【日　時】平成24年10月27日（土）16：00～
　【場　所】医学部刀城会館
　特別講演　群馬大学名誉教授
　特別講演　東京医科歯科大学副学長・名誉教授
　　お茶の水会医科同窓会理事
⑶　群馬大学医学部同窓会・刀城クラブ創設60周年記念祝賀会
　一般財団法人群馬健康医学振興会　移行お披露目会
　【日　時】平成24年10月27日（土）18：00～
　【場　所】医学部刀城会館
　【会　費】5,000円

平成24年度版同窓会会員名簿編集委員会からのお知らせ(第２報)

平成24年４月５日に、名簿編集委員会より会員4500名へ調査票を発送いたしました。会員の皆様には、調査票のご確認・ご返送をいただきありがとうございます。

５月10日の返送期日は過ぎましたが、ご返送いただければ名簿への反映に出来る限り対応させていただきます。お忘れの方は至急、調査票を投函していただければ幸いです。　委員長：安部由美子（昭57卒）

役員会だより

第２回役員会（平成24年２月23日）

出席者　山中前会長　他13名　学友会２名

報告事項

１．法人のその後の活動について
２．医学部代表者及び新任教授との懇談会について
３．同窓会財政基盤強化協賛金について
４．その他

協議事項

１．平成24年度入学生歓迎行事について
２．学術集会補助金について
３．名簿編集状況について
４．会報編集状況について
５．広報委員会について
６．その他

第３回役員会（平成24年３月29日）

出席者　森川会長　他20名　学友会４名

報告事項

１．法人のその後の活動について
２．学位記授与式及び医学科謝恩会について
３．平成24年度新入生歓迎行事について
４．同窓会・刀城クラブ創設60周年記念事業について
５．前橋支部役員会の開催について
６．その他

協議事項

１．学術集会補助金について
２．刀城クラブ及び財団のHPのブラッシュアップについて
３．会報編集状況について
４．名簿編集状況について
５．その他

学内人事

【昇任】平成24年５月１日
　齋藤　貴之（平３卒）保健学研究科生体情報検査科学准教授

学外人事

【昇任】平成23年12月１日
　森田　公夫（昭55卒）獨協医科大学越谷病院・腫瘍センター教授

【就任】平成24年４月１日
　佐藤　尚文（昭54卒）公立富岡総合病院　病院長
　石原　　弘（昭57卒）高崎総合医療センター病院長
　猿木　信裕（昭58卒）群馬県立がんセンター病院長

謹　告

ご逝去の報が同窓会事務局に入りました。
ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

正会員

昭和34年卒　金子　寛先生（平成21年９月19日逝去）
昭和25年卒　中里高明先生（平成21年12月４日逝去）
昭和28年卒　松本泰男先生（平成23年６月７日逝去）
昭和33年卒　柁原昭夫先生（平成23年11月２日逝去）
昭和33年卒　須藤　宏先生（平成24年３月11日逝去）
昭和24年卒　松本潤一先生（平成24年３月14日逝去）
昭和26年卒　松本兼文先生（平成24年５月８日逝去）

特別会員

狩野好一郎先生（平成23年９月28日逝去）
宮下鎌治先生（平成24年１月13日逝去）

編集後記

今年は例年に比べ春の訪れが遅く、構内の桜の開花も入学式から１週間ほど遅れ、さらに天候不順も重なったため、満開の花も瞬く間に葉桜に姿を変えてしまいました。昭和キャンパス内では建物の新築、改築、増築工事が繰り返され、樹木のスペースが犠牲となることがありますが、つい最近は立体駐車場増築工事のため、看護師宿舎脇から第４駐車場沿いの桜が伐採され、構内の残り少ない桜並木も今年の春限りとなりました。時の移ろいとともに身近な自然が遠ざかって行きますが、そこから眼を挙げると遠くの山並みの姿は変わらず、５月21日には東の空で見事な皆既日食が観察できました。今回の表紙には伐採前の満開の桜並木の写真を用いました。会報の記事と同様に同窓の皆様の想い出の一こまになりますよう願っています。（福田利夫）

編集委員　福田利夫(昭51卒)、平戸政史(昭53卒)、萩原治夫(昭56卒)、藤田欣一(昭56卒)、安部由美子(昭57卒)、大山良雄(昭63卒)、星野綾美(平13卒)、宮永朋実(平15卒)、岩崎竜也(3年)、稲葉遥(3年)、小尾紀翔(2年)、関口淳一(事務局)、須田和花早(事務局)